涙

藤原ゆりか

あたしだけがよくわかんない「さみしい」につつまれている気がしたのはいつからだろう。パパがいなくなっちゃった日から？ママが笑わなくなってから？

あー、なんかまた、涙出てきちゃったな。ぽろぽろぽろぽろぽろぽろぽろぽろぽろぽろぽろぽろ。泣きたくないのに、泣いちゃう。この頃ずっとそう。いやだな。

あたしが学校から帰ってきて、ちょっとのあいだ、自

分の部屋のベッドにうずくまっていろんなこと考える。そして考えれば考えるほど、涙が止まらなくなるんだ。

でも、いつまでも泣いていられなくて。ママが帰ってくるまでにはちゃんとしてなくちゃいけなくて。

あたしはある程度泣き済んだら、すぐにベッドから起き上がって晩ごはんの支度。これはもう、この頃の日課になっちゃったな。

晩ごはんができたのを見計らったかのように、ママが帰ってきた。ママは保険会社に勤めていて、いつもは

結構遅くて十時とかに帰ってくるのに、今日は七時に帰ってきた。

「早かったじゃん」

「今日はちょっとね。あんたに話したいことがあって」

ママの顔は珍しくはにかんでいた・その顔が少し気持ち悪かったな。

「もうちょっと待ってて。昨日のみそ汁、温め直しちゃうから」

「うん」

そういった瞬間、もう一つ足音がした。

「……お邪魔します」

そこには見慣れない、背の高い、男の人が立っていた。男の人があたふたしていると、ママの部屋から声がした。

「あ、そこらへん適当に座って？　麻綾、なんか飲み物出してやりなさい」

茫然と立っているあたしをママは無理やり動かす。あたしはコップを食器棚からだして、その人のためにお茶を注ぐ。その人は「お構いなく」と言いながら、あたしの顔を見た。そのちょっと笑った顔がすごく気持ち悪かったということだけは覚えてる。

そこからだなあ、この人に嫌悪感もったのは。

そんなことを知らないその人は、あたしがあげたお茶をおいしいといって喉を鳴らしながら飲んでいた。そして、その人の方から話しかけてきた。学校楽しいかとか、部活何やってんのとか、好きな人いるのとか……。あたしは全部ぶっきらぼうに答えたつもりだけど、着実に距離を縮めていこうとするその人の態度がますますキモくてイヤになった。

「あ、麻綾。この人にも晩ごはんあげて。大丈夫でしょ？　お米とか」

「……わかった、大丈夫だよ」

「できたよ」

あたしは急きょ三人分になった晩ごはんを並べて、ママを呼んだ。この男の人と一緒に晩ごはんを食べるのは本当にイヤだったけど、もう、どうしようもない。三人で一緒にいただきすって言ったの何年ぶりだろう？

食事、初めは三人とも黙って食べてた。何とも言えない空気にあたしは早く逃げたかった。そんな空気を壊したのはママの言葉だった。「あたし、この人と再婚するか

ら」

明らかに空気が変わった。というかこの男の人がここに来た時点でそんなことだろうというのは感じ取っていたけれど、こうやって口にされると言葉が重くのしかかってきた。

ママがニコニコしている男の人の紹介をした。

「高橋純也くん。会社の私の後輩よ。もっとはやくあんたに話そうと思ってたんだけど、いろいろ忙しくて今日になっちゃった。隠してたわけじゃないのよ？　ごめ

んね？」

やっぱり今日のママの顔は気持ちが悪い。いつものママの笑う顔じゃない。あたしはママから目線をそらせた。

でも、ママは話を続ける。

「今回こうやって再婚することにしたのは、前のお父さんがいなくなってから、もう半年経つけど、あんたにもいろいろ迷惑かけちゃったし、今だってご飯作ってもらっちゃったりして、家のこと全部任せちゃってもらってるじゃない？　やっぱりそれは麻綾にもちゃんと勉強してほしいし、なにしろそんなの普通の家庭じゃない

わ！　だからちゃんと家に「お父さん」をいれて、そしたら私も家事はちゃんとやるから。また、一緒にやり直そ？ね、あなたも一四歳なんだし、わかってくれるわよね？　ね？」

あたしはママの話にとりあえずはコクンと頷いておいた。すると、今まで話を聞いていた男の人が口を開いた。

「よろしくね、麻綾ちゃん」

あたしは晩ごはんを食べ終えると自分の部屋のベッドに潜り込んだ。さっきの泣いてた時とは違う感情。悲し

みは全然ない。むしろ怒り。あたしは怒ってる。なに？あんなキモい人とこれから過ごすの？　イヤだ。あんな人があたしのパパ務まるわけないよ。バカなんじゃないの？　あたしのパパのこと何にも知らないくせに。何が「麻綾ちゃん」だよ。気安く呼ぶなよ。あの人、絶対あたしにやさしくしない。あたしわかるもん。包み込んでくれるようなやさしさ、あの人にないもん。最初からママが目当て。あたし、捨てられるんじゃない？　きっとそう。あたしは捨てられる。

あの人と再婚しちゃダメってママに言っても、どうせ

怖い顔をして、強引に再婚するの。あたしには、本当に居場所がなくなっちゃったんだな。先週、学校の先輩にはフラれたし。もう、どこにも、ないんだな。あたしがいて良いところって。あ、また、泣いてるなあ。

もう、どっか行こう。ママも男の人も先輩もいないとここに。「パパ」を探しに行こう。ばいばい、ママ。あたしはもう、あなたの娘ではありません。

家から逃げ出した夜は寒かった。お金もないし、どこに行くのかもわからない。こんな夜遅くに街を出歩いたこともないから、不安になっちゃうあたしがいた。今日

はどこで泊まろうかな。満喫？　だからお金ないって。マック？　あんな暖房利きすぎた暑いとこやだ。じゃあ、どこに行くの？　わかんない。一四歳の彷徨ってる姿っておかしいよね。自分の周りの大人がいやんなって、いっときの感情で飛び出してさ。で、どこで何していいんだかわかんなくなっちゃって。結局、また大人に助けてもらうんでしょ？　あー、いやだいやだ。これだから子どもはいやだ。で、なにが一番いやだって、そんないやな子どもを演じてんのがこのあたし。

まあ、そんなことはどうでもいいの。パパ、早く来て

よ。あたしもあの家から抜け出したんだから、パパと一緒だよ。ねえ、だっこしてよ。寒いから。

◇

遊びのつもりだった。

いつもの時間に、いつもの場所に、いつもの連中と一緒にいる、いつもの光景。そこにただ女の子どもがいただけだ。そのこどもに話しかけてみた。子どもを怯えさせておもしろがりたかった。だけど子どもは、体は震えていたが、毅然とした態度だった。

子どもは麻綾と名乗った。歳は十四だという。思った以上に子どもだった。俺を怖がることなく、眼をくりくりさせて、まっすぐ俺の方を見つめる瞳に、ほのかな、極めてほのかな好意と、強い嗜虐心が生まれた。

「おい」

俺は後輩の一人を呼んだ。

「はい、なんすか？　その子ども」

後輩は子どもの顔を見ていった。

「持って帰る」

「は？」

「持って帰る」
「先輩何言って……」
「持って帰るっってんだよ！　早く車出せよバカ！」
慌てふためく後輩を尻目に、子どもに「行くぞ」といってついてこさせた。コクンと頷くととてくてくついてきた。
後輩たちが、俺のことをとても心配そうに見てる。中には楽しそうに見てるやつもいたが。
車の中は当然ながら異様な光景だった。女を乗せてるわけではない。子どもを乗せているのだ。そして、この

子どもは車に乗ってからずっと前を向いているばかりで、何にもしゃべらなかった。この重々しい空気がある意味新鮮だった。しかし俺も俺でいろいろ聞きたかった。

「おい」

そういうと、子どもは黙って俺の方に顔を向けた。

「お前、怖くないのかよ」

「全然」

「全然って……。今何されているのかわかってんの？」

「誘拐」

「だったら！」

俺は左足で子どもの右ひざを蹴った。「もっと誘拐されているようにしろよ！　怯えろよ！　くそが！」

子どもは一瞬痛みに耐える顔をしたが、すぐに元に戻った。これじゃあ、誘拐のしようがない。つまんねえ。俺はさらに怒った。

「もういい。わかった。家に着いたら覚えとけよ。そんとき泣き叫んだって誰も助けてくんねえぞ？」

「それでいいよ。ご飯食べるのとトイレだけさせてもらったら、あとは何でも貴方のいうこと聞くから」

可愛げがない、このくそアマ。俺は左手でグイッと子ど

もの頭を引っ張った。子どもは少しだけ悲鳴を上げた。

「さっきからうるせえんだよお前。黙れ。な？　あと、俺のことはパパと呼べ」

子どもは黙って俺の瞳を見つめた。車の中は再び重々しい空気が纏った。

◇

「パパ」はパパにそっくりだった。眼も指も強引に引っ張られた感じも。あれ、あたしこの人に誘拐されてる

んだよね？　なのに……なんで？　わからない安心感。あたしこの人が新しいパパならよかったのにな。

「パパ」のおうちは独り暮らしの割には広くて綺麗だった。「パパ」はすぐにあたしをお風呂に入るように促した。そしてお風呂から上がると「パパ」が立っていた。

「これ。タオル」

「……あ、ありがとうございます」

あたしだって中学生だし、あまり他の人に自分の裸を見られたくなかったけど、「パパ」の前では、もう、どうでもよかった。「パパ」はあたしの裸を見て、何にも言わ

なかった。「パパ」は自分の服を渡してきたけれど、あたしにはとても大きかった。「パパ」が初めて笑いながら、「服買わなきゃな」と言った。

「パパ」は横に座るように促した。その瞳は車の中の怖い「パパ」ではなかった。

「お前、お父さんとか、お母さんとか、いねえのか？」

「お父さんはいない」

「なんでだ」

「お父さんの浮気」

「いつからだ」

「半年前から」
「お母さんはどうしてる」
「……今日、いなくなった」
「お父さんは好きだったのか」
「……うん」
今日のことと、あの時のことを思い出してまた涙が出て来ちゃった。
「そうか。俺も両親は小さい時に死んだんだ……」
そういうと、「パパ」はあたしにキスを迫った。これで二回目。一回目はパパ、二回目は「パパ」。

「パパ」はそのままあたしの舌を絡ませたり、乳房や太ももをまさぐった。それはパパの時も一緒だった。だからかな、なんかちょっと安心した。そのあとのことはあんまり覚えていない。次の日の朝にちょっと服が乱れていただけだった。でもその時久しぶりにまったりとした気分になった。

夢を見たの。パパがいなくなった時の夢。学校からおうちに帰る途中に、パパがママじゃない女とイチャイチャしていた。その女の顔が化粧でとても汚かったのがすごく印象的だった。その姿を見たとき、あ、パパはあた

しから離れていくんだと思った。ママよりも誰よりもあたしから。そして別の日にママに浮気が発覚して、また別の日にパパとお別れになった。そのお別れの日、パパはあたしを優しく抱きしめた。それが最後のパパの指の感覚だった。

「パパ」とまったりするのは、最初の日ともう一日あった。その日も夢を見た。それはまだ浮気が発覚する前に一回だけ、パパに抱かれた日のこと。あたしはまだその時は小さかった。身体も心も。

「なにしてんの、パパ？」

「いいから、黙ってなさい」
「黙ってって……あっ……ちょっと、どこさわってんの？」
「黙ってなさい！」
「んっ……うっ」
頭から火照っていく。もうあたし自身の力じゃ何にもできなかった。その時のあたしは中学校に上がったばかりだけど、いけないことしてることぐらいは分かった。でも、いつも優しいパパがその時はもっと優しかった。でも瞳だけはちょっと怖かった。パパの顔をずっと見て

いたらあたしも息が荒くなってきた。口呼吸になった。パパやめて。本当にあたしなんにもできないから。怒らないし、逃げないから。パパやめて。それ以上はダメだよ。でもパパ、パパ、パパ、パパ……！

◇

いつまで経っても麻綾が起きてこない。あいつ、もう、五日目にしてこの生活に慣れやがったな。

「麻綾。いつまで寝てんだよ、朝だぞ」

「つん……ん」

「ほらいつまでもぐでっとしてねえで。さっさと着替えろよ。朝ごはんできてんだよ」

「ん……おはよう、パパ」

「うん、おはよう」

麻綾は目をこすりながら起き上ってきた。昨日の夜の麻綾は最初のころよりも女らしくて、こんな中学生に興奮してしまった。ばからしい。急に始まった共同生活も楽しくなってきたじゃねえか。普通に生活費とか考えるし。あとはこいつの学校とかどうしよう。でもそんなの

どうでもいいか。俺の女だ。俺の好きなようにする。

「いただきます」

「召し上がれ」

麻綾のために作ったスクランブルエッグとトーストとウインナー。

「美味いか？」

「うん！」

こんな子供の元気な声と無邪気な笑顔によくわかんない感情が働いている。俺も歳を取ったのか。

なんか最初は嗜虐心とかばからしい感情とかわいてた

けど、両親がいないやついじめてたってしょうがない。いつかがくるまで俺が育てる。さて、今日はどこに遊びに行こう？

そういやこんな会話をしたことがある。

「怖くねえのか？　俺が」

「全然！　だって優しいもん」

「そうか。俺は優しいのか」

「そう。だからずっとパパになって！」

「……わかった」

「もう、あたしにはおうちないもん」

その時麻綾が初めて俺の前で泣いた。一番かわいかった。俺は思わず抱きしめた。俺がこいつをなんのために誘拐したのか、もう、わからなくなった。

◇

七日目の朝だった。いつも寝るときは「パパ」の隣、「パパ」の腕枕。今日もそんなふうにして寝てたら、呼び鈴が鳴った。「パパ」が出たら、そこには四人の警官が

いた。「パパ」が逮捕されるのだ。「パパ」は警官の問いに冷静に答えて、もう一人の警官が私に向かってやってきた。

「大丈夫かい？」

「は、はい」

「痛いとこないい？」

「ないです」

「よし……九時十分、保護」

何が「保護」だ。あたしはただ残されるだけなのに。あたしの「パパ」はまたどっか行っちゃうんだ。あた

しがまた居場所を見つけた瞬間どこかに行っちゃうんだ。あたしは今度どこに行けばいいの？　誰に抱かれればいいの？　わかんない。パパの温もりを誰に補えばいいの？　パパの温もりを求めるのはいけないことなの？犯罪なの？　あたしはこんなのいや。ただそれだけなのに……。

「パパ……！」

あたしは出せる声を全部出して叫んだ。

「また、逢えるよね？」

「パパ」は何にも答えてくれなかった。でもあたしはあ

きらめない。必死に警官の制止する手を振りほどいて、もう一回叫んだ。

「パパ！　大好き！」

周りの警官たちはそんなあたしを見てとても驚いてたけど関係ない。あたしはパパ以外の初めて好きな人に精いっぱいの好きを叫んだ。伝わってくれるといいな。愛なんかわからないから、ただ、好き。

◇

取り調べをされている時の俺はいたって冷静に務めた。どう考えても、中学生と今年で二五になる俺が肉体関係

を持つのはおかしいし、いっときの感情で誘拐したのは非難されることだ。でも、これだけはどうしても伝えたかった。それはあいつの今後を考えてほしいってこと。あいつは保護されても帰るところがない。いや、実は知っている。後輩から聞いた。親がちゃんといることを。しかしその親はこれからあいつをしっかり育てるのだろうか。そこだけが気がかりだ。だから、警官に被害者及びその家族に言うことはないのかと言われたのでこう答えた。

「あいつの涙を、誰かちゃんと受け取ってやって欲し

「い……」